

井上圓了の幼児教育理念と黎明期の京北幼稚園

Inoue Enryou's early childhood educational philosophy and the dawn of Keihoku kindergarten

角 藤 智津子 高 橋 直 美

KAKUTO Chizuko, TAKAHASHI Naomi

序章

第1節 研究の背景

東洋大学の創設者である井上圓了は、1905年（明治38）年5月に東京市本郷区富士前町に京北幼稚園を開設した。文部省（1905年）¹によれば、日本の幼稚園数は313園、在園児数28,676人、5歳児の就園率1.2%であったことを考えると、日本の幼稚園の中では非常に早い時期の開設である。井上圓了は、なぜこのような早い時期から幼児教育に着目していたのか、また、開設当時の京北幼稚園はどのような教育・保育を行っていたのかについて研究した。

研究に着手してみると、井上圓了の幼児教育についての考えや、黎明期の京北幼稚園に関する資料が少ないことが判明した。

京北幼稚園は2016年4月現在、学校法人東洋大学設置となり、1905年の創立以来、現在地（旧地名：東京市本郷区富士前町、現地名：東京都文京区本駒込）で教育・保育を行っている。しかし、関東大震災による被害は免れたものの、第二次世界大戦中の1945年（昭和20）年4月の空襲で園舎を焼失し、歴史的な資料は残っていないと聞いている。現存の資料にあたり、井上圓了の幼児教育についての考えや、黎明期の京北幼稚園について明らかにすることが急がれる。

第2節 研究目的

井上圓了は、1905年（明治38）年5月から1907年（明治40）年3月まで京北幼稚園園長の職に就いていた。この時期を京北幼稚園の黎明期と位置づけ、研究対象期間とする。

本研究では、2つの点を明らかにしたいと考えている。

1点目は、井上圓了の幼児教育の考え方をすること。

2点目は、実際に行われていた保育内容を知ることから、京北幼稚園の黎明期における教育・保育の特色を捉えること

である。

これにより、これまでほとんど論じられていない井上圓了の幼児教育理念と教育・保育実践を知ることができる。東洋大学の学祖である井上圓了による明治期の幼児教育の考え方を学生に伝えることは、自校教育として意義のあることであり、また学生の勉学意欲を促すことを可能にする。

第3節 研究方法

文献研究および訪問調査研究

本報告書は共同執筆であるが、第1章は高橋直美が、第2章は角藤智津子が主に担当する。

第4節 先行研究

東洋大学の前身である哲学館に関する井上圓了の教育理念や歴史については、東洋大学から多くの書籍が出版されている。三浦節夫(2012年)²は、井上圓了に関するさまざまな分野の先行研究を整理して示しているが、幼児教育についての研究の記載は見当たらない。三浦節夫(1987)³『井上円了の教育理念歴史はそのつど現在が作る』や竹村牧男(2011年)⁴『井上円了の教育理念』は東洋大学が中心であり、幼児教育に関する研究は管見では見あたらない。

第1章 井上圓了の幼児教育に関する考え方

第1節 井上圓了の半生

井上圓了の誕生から京北幼稚園園長を辞すまでの半生を、資料1「井上圓了略年譜」に示した。

井上圓了は1858(安政5)年3月、越後長岡藩領の三島郡来迎寺村(現・新潟県長岡市、合併前は新潟県三島郡越路町)にある浄土真宗大谷派慈光寺の長男として誕生した。10歳で漢学を学び、13歳で得度、16歳で長岡洋学校に入学して洋学を学び、1877(明治10)年に19歳で京都東本願寺の教師学校英学科に入学する。翌年には東本願寺の国内留学生として東京大学予備門に入学し、3年間在籍したのち、唯一の一期生として1881(明治14)年9月に東京大学文学部哲学科に入学する。

東京大学では西洋の哲学を学び、身近にあった「仏教」を西洋哲学の観点から見直すことで、仏教の中には東洋の哲学が脈々と流れていることを発見する。そして自らの宗教論や哲学論(のちの『真理金針』『仏教活論序論』等)を『明教新誌』に連載し、1884(明治17)年には「哲学会」を創設して、『哲学会雑誌』を創刊する。その中で今日の東洋大学の教育理念でもある「諸学の基礎は哲学にあり」と考えるようになり、「哲学の研究・普及が国家・社会の文明を発展させるために不可欠」であること、さらに「西洋哲学の研究に加えて、東洋哲学の研究が必要」であることを主張する。

翌1885(明治18)年に東京大学文学部哲学科を卒業するが、宗門の幹部や国家官僚としての活躍を望まず、ひたすら哲学の普及と理想の学校の開設を考え、1887年1月には「哲学書院」を設立(～1887年)、同年2月には『哲学会雑誌』を創刊して9月には東京市本郷区竜岡町の麟祥院に哲学館(東洋大学の前身)を創立する。

1888(明治21)年6月9日には欧米の政教関係・東洋学の研究状況の視察のためにアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、エジプト、イエメンに一年間旅行(第1海外視察)し、日本人、日本国としての独自の位置を探り、帰国後「哲学館を大学に発展させる」計画を表明する。

翌1889(明治22)年には東京市本郷区蓬萊町に校舎を新築、1896(明治29)年火災のために校舎は焼失したが、1897年東京市小石川区原町に新校舎を落成した(哲学館は1903(明治36)年専門学校令により「私立哲学館大学」となり、井上圓了の退隠後に財団法人として、1906(明治39)年に「私立東洋大学」と改称される)。

表1 井上圓了略年譜⁵

井上圓了略年譜	
1858（安政5）年3月	越後国、真宗大谷派慈光寺の長男として誕生
1877（明治10）年9月	京都東本願寺の教師教校英学科に入学
1881（明治14）年9月	東京大学文学部哲学科に入学
1887（明治20）年9月	哲学館（東洋大学の前身）を創立
1888（明治21）年6月	第1回海外視察に出発（1889年6月帰国）
1899（明治32）年2月	京北中学校を設立、開校式を挙げる
1902（明治35）年11月	第2回海外視察に出発（1903年7月帰国）
1905（明治38）年4月	京北幼稚園を設立
1906（明治39）年1月	哲学館大学学長・京北中学校校長を辞任

1899（明治32）年2月に京北中学校を設立、開校式を挙げるした圓了は、翌年4月に文部省から修身教科書調査委員を、翌々年には内閣から高等教育会議議員を委嘱される。

その一方で、海外インドの聖跡参拝、欧米の大学教育・経営、社会教育の視察のため、1902（明治35）年11月に第2回海外視察に出発（1903年7月帰国）し、インド、イギリス、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、アメリカ、カナダを回る。この視察でイギリス各地の大学教育、社会教育の状況に多大な影響を受けた圓了は、のちの「全国巡講」で「言論の自由」「人格の尊重」「社会道德」を講演の軸として組み立てる。

1905（明治38）年4月には人格形成の基礎作りとして幼稚園教育の必要性を重視し、京北幼稚園を設立、自ら園長として教育にあたった。

ところが、1906（明治39）年1月、圓了は体調不良を理由に哲学館大学学長・京北中学校校長・京北幼稚園長を辞任し、以降、生涯にわたり全国巡講を活動の中心とする。

第2節 幼児教育理念

（1）最初の幼稚園論

井上圓了は1890（明治23）年「哲学館開設ノ旨趣」を発表するが、その2年後、雑誌『天則』に「幼稚園論」（1892年）⁶を掲載している。「児童の教育は幼稚の時を最も大切とする」「幼稚園類似のものを町々村々に設置することにして、町村の寺院をあてれば費用が安く済む」など、井上圓了の幼稚園に対する教え方を見ることができる。これは幼稚園に関して圓了が論じた初めての著作である。

この「幼稚園論」の2年前には雑誌『日本人』に「宗教家をして宜く慈善事業を起さしむへし」⁷として慈善事業が貧民救済に止まらず、慈善病院、慈善学校、貧院、育児院、盲啞院、癲狂院、感院等の設置に広がることも要望し、また同年「廢娼論者に告ぐ」⁸には「社会相對の道德を改良せんと欲せば、先づ個々人々の教育に改良を施さざるべからず、而して人の教育は家庭より始まり、家庭の教育ハ一家の風儀に本づき、一家内の風儀は主人事の徳育に」あると述べ、家庭教育の重要性を強調している。

このような徳育重視の姿勢は井上圓了の教育理念の中心として、哲学館や京北中学校、京北幼稚園の設立や教育に生かされ、また家庭教育を重要視する方針は幼稚園教育の在り方の根幹をなすことになる。井上圓了はこの時すでに幼稚園についての教育理念を持っていたといっても過言ではない。

(2) 海外の乳幼児施設視察

第2回海外視察を行った圓了は、『西航日録』(1904年)⁹を記している。ロンドン東部の貧民屈で「貧民の状態を見て奇怪に感ぜしは、児童の衣服の汚穢毀損せるにもかかわらず、一人の鼻液を垂らしおるを見ざる一事なり。」として涙を垂らしている子どものいないことに驚き、「鼻だせし子供の道に見えざるは国の開けし印なるらん」という短歌をつくり、また、「街路、塀等になんらの落書きの跡を見ざるは、実に感心せり。わが国の児童のとりて学ぶべきところなり。」として落書きのない様子にも感心している。

また、ダブリンに滞在した際には「各大学はもちろん、男女の中学校、小学校、幼稚園、各宗大学等を参観せり。」とあるように、まさに幼稚園の見学を行っているのである。

1902(明治35)年2月11日にロンドン東部の貧民屈を視察した際には、「孤児院等を巡検せり。その中に、貧民の乳児を一日限り委託を受くる組織あり。すなわち、乳児ありて出でて労役をとることあたわざるものは、銅貨一文を添えてその子を託すれば、終日飲食を授けて養育する所なり。」と記している。

ロンドンで視察した乳児院について、

乳児院は貧民の乳児を乳養する處にして、英国龍動の如き貧民多き場所には、殊に此組織の完備せるものあるを見る。其方法は貧民が乳児の為に夫婦ともに出で、労働に就く事能はざる場合に、毎朝家を出づるに当り、其乳児を乳児園に携え行き、之に乳養を託し自ら出で々労働に就き、夕刻再び乳児園に行き乳児を受け取りで家に帰る。¹⁰

と述べている。ここで言う「乳児院」は今日の日本における乳児院ではなく、託児所のようなものであろう。更に、乳児園には数名の乳母と子守がおり、乳児を養う食品、乳児を遊ばせる遊具、そして貧民の住居とは雲泥の差である建築物と居室があり、働く両親のためだけでなく、子どものためにも幸福な施設であると述べている。しかも、乳養料は1日銅貨1枚という非常に安価であったとも述べている。

働く両親のためのこのような安価な施設に対する興味は、1893(明治26)年6月に発表された「哲学館開設ノ旨趣」¹¹にある「余資なき者、優暇なき者」を大切にするという視線と同じ方向を向いていると言えるだろう。

(3) 徳育教育

井上圓了は、徳育の手本として、1890(明治23)年に出された『教育に関する勅語』(以下『教育勅語』とする)を用いれば、洋の東西も宗教も関係ない日本主義的な道德教育ができると述べている。1893(明治26)年4月に出された「哲学館の目的」に、

余は当時我邦の諸高等学校の西洋主義を取れるに反対して日本主義を取り教授上に日本語を用ふるは申迄もなく教師も決して西洋人を用ひさることと定めり然れども方今は勅語一たび下りて教育の方針一定するに至りしを以て殊更に日本主義を唱ふるの必要なし

と記し、『教育勅語』を大切に考えていたことがわかる。

井上圓了は「修身教育普及の一策」(1905年)¹²で、徳育教育について何点か指摘している。

- * 徳育教育には貧富の差は関係なく、多くの子どもが「日本の家庭の代行」たる幼稚園に通うことで、本来家庭で行われるべき徳育教育が幼稚園できちんに行われ、国民に徳育教育が行きわたることになり、それが慈善事業にも社会貢献にもつながる。
- * 生活レベルが中等以上の社会では、「乳母子守婢僕の手を借りて教育す」するため「幼児を大切にせんとする一念より気儘勝手に任せ、為に幼児の教育を誤るに至るは往々見るところなり」となってしまう、下流社会においては「其境遇が幼児を訓育するに適せず、其知識といひ其住居といひ共に訓育教養に適せざるのみならず、朝夕糊口に逐はれ労働に忙はしく、殆ど幼児の保育を顧るの暇なし」のため、きちんとした養育をすることは難しいとしている。
- * 欧米では宗教教会に日曜礼拝等することで修身を身に着けていることに注目し、日本でも家庭教育が児童の修身の練修の場でなければならないと述べている。圓了にとって幼稚園は、児童の養育のためのよき環境＝児童にとって幸せな環境のなかで、本来家庭で行われるべき修身を身に付けられる場であった。それは井上圓了の生涯教育の根幹である修身教会が「必ず家庭及社会教育の製造元」だからである。

その一方で、『東洋大学百年史』(1988年)¹³によれば、1905(明治38)年の京北幼稚園設立認可願書では保育料は1人あたり1ヶ月1円20銭と計画しており、決して安価であるとはいえなかった。ちなみに、週間朝日編(1988年)・週間朝日編(1995年)¹⁴によれば、1905年当時、大学卒業銀行員の初任給が30円、小学校教師初任給10～13円、巡査の初任給が9円であったという。

ただし、京北幼稚園の教育理念が幼稚園の教育内容として、知育のみならず、特に徳育を重視することは哲学館の教育理念と一緒であり、「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園の事に及ぶ」¹⁵においても、1905年頃の幼稚園が智育体育に特化し、徳育が欠如しているのはいかなるものかという意見を述べている。

(4) 幼稚園教育についての考え

1902年(明治38年)5月3日に京北幼稚園開園式が行われ、直後にほぼ同じ内容の2つの論文1)、2)が発表された。これに対し、3)にも井上圓了の論文が転載され、井上圓了論文への意見が示された。

1) 井上圓了「修身教育普及の一策」『修身教會雑誌』第17号1905(明治38)年5月11日)¹⁶

2) 井上圓了「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園のことに及ぶ」『日本之小學教師 第7巻77号』1905年(明治38年5月15日)¹⁷

3) 著者名なし「井上博士の幼稚園談」『婦人と子ども』フレーベル会 1905年6月¹⁸

の3つである。これは井上圓了が幼稚園について論じた一番長い論文である。

主要な点としては、

- ① 幼稚園の保育は小学校の教育を手本にするのではなく、家庭的なものにすべきである。
- ② 道德教育は幼稚のときより始めるべきである。日本の幼稚園では、智育体育に偏り、徳育が欠

けている。西洋ではキリスト教により徳育教育がなされているが、日本では家庭でも幼稚園でも行われていないため、幼稚園で教えることを考えなければならない。

- ③ 幼稚園は都会に多く、上流の家庭の子どもたちが通っている。下流の家庭の子どもたちに幼稚園教育を与えたい。真宗が発展している加越能¹⁹三国では、宗教教育を家庭できちんとしており、効果を上げている。寺院を利用した幼稚園の普及を行えば、加越能三国のような効果が得られる。また、園舎を新たに建築しなくても、寺院は幼稚園と同じような環境が元々備わっている。寺院で幼稚園を開き、子育ての経験をもつ住職の妻や小学校教員の妻が保姆をするということが考えられるのではないか。

- ④ 女子高等師範学校附属幼稚園が日本では一番完備した幼稚園であるが、アメリカ的である。があげられる。論文中では、女子高等師範学校附属幼稚園について、

東京御茶の水女子高等師範学校附属幼稚園が本邦幼稚園の元祖にして亦最も完備せるものなり。而して其設備はすべて亜米利加の幼稚園を学び諸事みな亜米利加風に倣へりいいと聞けり。果して然らば其幼稚園は亜米利加的幼稚園と謂はざるべきからず。(中略) 若し今後日本の幼稚園を設けんと欲せば西洋の模写にあらずして日本の家庭よりあみ出したる幼稚園を作らざるべからず、然るに今日未だかゝる幼稚園なきは我邦幼稚園の未発達を證するに足る。

と記している。この1) 井上圓了「修身教育普及の一策」²⁰や2) 井上圓了「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園のことに及ぶ」²¹への意見として、3) 著者名なし「井上博士の幼稚園談」『婦人と子ども』²²に井上論文への意見が表明されたのであるが、ここにある井上論文は『日本之小学教師』より転載されている。

* (お茶の水) 附属幼稚園がアメリカ的であり、日本には日本的幼稚園がないと言っているが、どういうことを意味しているのか分からない。

* 幼稚園の保育が家庭と一致しないという点についてよくわからない。

と述べ、井上圓了が京北幼稚園の園主になったことに注目しつつ、圓了の幼児教育論についての疑問を述べている。これに対し、井上圓了がどのような意見を持ったかは不明である。

しかし、前述1893(明治26)年4月の「哲学館の目的」に、

余は当時我邦の諸高等学校の西洋主義を取れるに反対して日本主義を取り教授上に日本語を用ふるは申迄もなく教師も決して西洋人を用ひさることと定めり然れども方今は勅語一たび下りて教育の方針一定するに至りしを以て殊更に日本主義を唱ふるの必要なし

と述べ、徳育として『教育勅語』を用いれば洋の東西も関係ないとしていることから①女子高等師範学校附属幼稚園が日本の幼稚園の元祖であるがアメリカ風の教育をしており、日本主義を根幹にした幼稚園はまだない。しかし、②第2章第2節の(3)で述べているとおり、女子高等師範学校は当時最高の教育をしており、しかも京北幼稚園開設時に採用した保姆二人(林ふみ、家高たま 後述)がフレーベル会に所属していることを考えると、圓了が女子高等師範学校附属幼稚園やその教育内容を

全面否定しているわけではないことがわかる。

菊地章太（2013）²³によると、井上圓了は1886（明治19）年に、加賀前田家の御典医吉田淳一郎の娘敬と、勝海舟の三女夫妻である目賀田の仲人で結婚し、一男二女をもうけている。

三浦節夫（2006年）²⁴によると、井上圓了の妻敬は1862（文久2）年生まれで、1880（明治13）年7月に東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）の小学師範学科を卒業しており卒業後はA6番学校（現在の女子学院）、1886（明治19）年には東洋英和女学校の普通学（句読・習字・算術・語学・地理）や数学の教師にもなっている。

長女の滋野は1890（明治23）年生まれで、1907（明治40）年に女子高等師範学校附属高等女学校（現在のお茶の水女子大学附属高等学校）を卒業し、二女の澄江は1899（明治32）年生まれで、1917（大正6）年に東京女子高等師範学校附属高等女学校（現在のお茶の水女子大学附属高等学校）を卒業している。

井上圓了の家族は、女性は全員が東京女子師範学校や附属高等女学校を卒業しており、東京女子師範学校との関係が強い。井上圓了が娘の教育に熱心であったかどうかは不明であるが、少なくとも妻が卒業した上、娘二人を東京女子高等師範学校附属高校に通わせているのであるから、東京女子師範学校（女子高等師範学校、東京女子高等師範学校）の教育や附属幼稚園の教育を強く否定してはいなかったであろう。

また、1890（明治23）年に『教育勅語』が出されて以降、各教育機関においては『教育勅語』がその根幹にすえられており、『教育勅語』を徳育の中心にすえていた圓了の反感を買うものではなかったと考えられる。

井上圓了が国民道徳論を普及しようとして設立した修身教会について池田英俊（2001）²⁵は、当初の教育慈善から教育福祉へと展開されたものであったとしている。まさにその教育福祉事業のさきがけが、京北幼稚園設立であるといえるだろう。

（5）湯本武比古の協力

ここで注目すべきは、京北中学校・京北幼稚園を圓了とともに設立・運営した湯本武比古である。信濃国高井郡赤岩村（現長野県中野市）出身で東京師範学校中学師範科を卒業し、文部省に入省して東宮明宮（大正天皇）の教育掛を拝命した人物である。ドイツに留学して皇族に関する教育やその方法を研究し、高等師範嘱託教授として教育学を講じ、雑誌『教育時論』の主幹などを経たのち、1899（明治32）年に圓了を補佐して京北中学校を設立している。徳育を重視する湯本武比古の教育思想には、開発教授や科学思想の養成など井上圓了と通じるものが多々あったと思われる。

湯本は圓了が京北幼稚園園長を辞任した後を継ぎ、1907（明治40）年に京北幼稚園の代表者となり、その翌年、圓了とともに京北実業学校を設立して校長に就任している。

湯本武比古（1919）²⁶によれば、井上圓了は教育を施すすべての機関、幼稚園、小学校、中学校、専門学校（哲学館）を設立する計画を持っていた。京北中学の設立後、小学校設立も試みたが、良い敷地を得ることができず中断していた。京北幼稚園を設け、更にその敷地内に小学校を建てることにしたが、幼稚園建設後に徳育教育は幼稚園と中学校でしっかりと行えば、小学校は公立でも問題ないという考え方になり、敷地の一部に自宅を建て大部分を貸地にしたという。

第2章 黎明期の京北幼稚園

第1節 日本における幼稚園の始まり

日本で最初の幼稚園については、いくつかの説がある。しかし、1877（明治9）年に「幼稚園」という名称を用いて日本で最初に設立されたのは、東京女子師範学校附属幼稚園²⁷である。

フレーベル（Fröbel, Friedrich, Wilhelm August）はドイツで1837年に世界で最初の幼稚園（Kindergarten）を作った。文部省（1981）²⁸によれば、「女子師範学校附属幼稚園では、このフレーベルの幼稚園教育の考え方を取り入れていた。付属幼稚園では関信三を監事とし、ドイツ人クララ・チーテルマン（松野クララ）を首席保母、豊田英雄らを保母としてフレーベルの幼稚園を模範とする幼稚園保育を開始したのである。開園当初の付属幼稚園では、園児は上流階級の子女が大部分を占めていた」という。

保育教材としては、フレーベルの考案した恩物を大半に取り入れていた。

その後、日本各地で幼稚園が作られたが、幼稚園というものがそれまでではないため、すべての幼稚園で、フレーベルの考えを取り入れた東京女子師範学校附属幼稚園の保育方法に倣うことから始めざるを得ない状況であった。

なお、本報告においては、表2に示したように、東京女子師範学校附属幼稚園の園名は、時期に合わせた名称で記述する。

表2 明治時代の女子師範学校附属幼稚園の園名の変化

年号	園名
1876年（明治9年）	東京女子師範学校附属幼稚園
1885年（明治18年）	師範学校附属幼稚園
1890年（明治23年）	女子高等師範学校附属幼稚園
1908年（明治41年）	東京女子高等師範学校附属幼稚園

第2節 京北幼稚園設立

（1）設立の理由

『東洋哲学』（1902年）²⁹に紹介されている「京北幼稚園設立旨趣」によれば、井上圓了は、ロシアとの開戦の記念に、報恩として、教育の新規事業を行いたいと考えた。東京市内では、幼稚園教育が欠乏しているので、幼稚園教育を始めるとしている。つまり、日露の開戦を記念し、欠乏している幼稚園教育の事業を行い国に報いることが、京北幼稚園設立の動機である。

井上圓了（1904）³⁰は、仏教を念頭において、宗教心を付けるためには、「中学よりは小学小学よりは幼稚園を設ける方が効力がある」としている。そして、中等教育の段階になってから初めて宗教について学ぶのではなく、幼少の頃より、両親への朝夕の挨拶を習慣付けることから宗教心の養成は始まるとして、中学校設立より幼稚園の設立のほうが必要であるとしている。

井上圓了の幼児教育理念の中心であり、生涯教育理念の基である『教育勅語』を中心とした徳育教育を普及させるために、京北幼稚園設立を構想したのであろう。

京北中学校教員の中川理吉（1947）³¹は京北幼稚園の設立について、「社会国家のため優良園児の保

育に従うことになった」と述べている。

図1からわかるように、1906（明治39）年から私立幼稚園の数が増加している。文部省『学制百年史』³²によれば、「明治19年に40園に満たなかった幼稚園は、20年には67園となり、毎年20園ないし30園の増加をみせ、20年代の終わりには200園をこえた。この結果、30年には、小学校の1年生に入学した児童の約1%が幼稚園を修了している。それ以後も、幼稚園は発達を続けたが、30年代の終わりごろから私立幼稚園の発達が著しくなり、国公立幼稚園の発達は遅々とした状態であった。特に40年3月「小学校令」が改正され、尋常小学校の修業年限が六年となったため、市町村費をそれだけ多くこの方面に支出しなければならなくなり、公立幼稚園の設置が財政上困難となった。」とある。

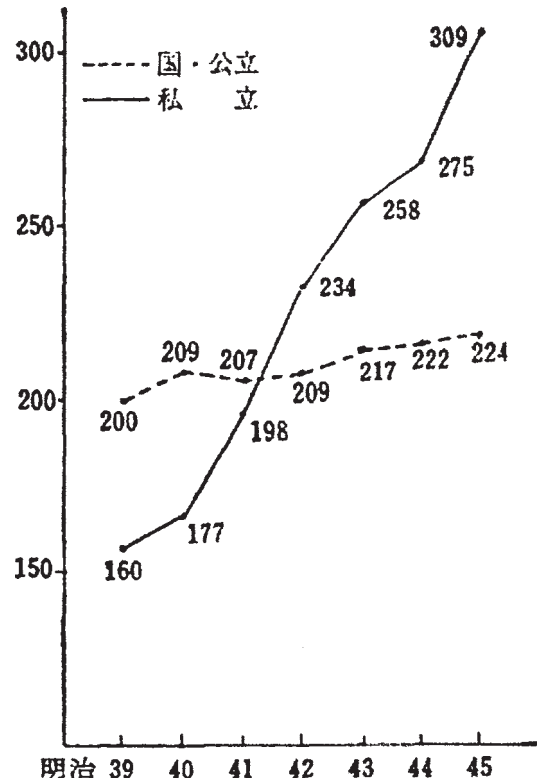


図1 幼稚園の推移（国公立・私立別）『学制100年史』³³より

1899年（明治32）年に「幼稚園保育及び設備規定」が制定されたことにより、幼稚園に必要な要件がはっきりし、私立幼稚園が設立しやすくなった時期でもあった。

（2）私立京北幼稚園設立認可願書

1905年（明治38）年2月に東京府に、『私立京北幼稚園設立認可願書』³⁴提出した。

1890年（明治12）年9月に「教育令」公布され、1891年（明治13）年12月には改正された。公私立幼稚園は文部卿の監督内（にあるもの）と定め、幼稚園を学校と別個のものとしながらも学校と同様に扱った。これにより幼稚園の設置・廃止・認可には届け出が必要になった。

更に、1902年（明治14）年1月には文部省は「府県立学校幼稚園書籍館等設置廃止規則」を定めた。文部省（1901）³⁵によれば、「幼稚園を設置しようとするときは、設置の目的、位置、保育の課程、入園退園の規則・休日等、保母等の職務心得およびその人員・俸額、敷地建物の略図・坪数等、経費収入支出とその細目、名称、保育用具等、幼児の概数、保母の学力と履歴を記載した書類を添えることとし、廃止しようとするときは、廃止の事由、資産の処分方法等を記載した書類を添えることとした。また同時に「町村立私立学校幼稚園書籍館等設置廃止規則起草心得」を定め、その中にはほぼ同様な規定を設けることとした」となり、私立幼稚園は設置を希望する際は、設置、保育法についての書類を添えて府知事県令に届け、認可を得なければならなくなった。

1899（明治32）年に「幼稚園保育及び設備規定」が制定されたことにより、幼稚園に関する法的規定ができた。この規定は、1947（昭和22）年の学校教育法の制定まで幼稚園のあり方を決めるものであった。表3に示したように、1905年（明治38）年2月に東京府に提出した「京北幼稚園設立認可願

書」は、「幼稚園保育及び設備規定」に則ったものになっている。

表3 「幼稚園保育及び設備規定」と「京北幼稚園設立認可願書」の比較

	幼稚園保育及び設備規定	京北幼稚園設立認可願書
幼児	満3歳から小学校に就学するまで	満3歳以上の幼児
保育時間	一日5時間以内	毎週28時間
保姆	保姆1人に幼児40人以内	毎組に1名から2名を置く
定員	100人以内、150人まで増加可能	90名を年齢に応じて3組に分ける
保育項目	遊戯・唱歌・談話・手技	遊戯唱歌談話手技
建物	平屋造りとし、保育室、遊戯室、職員室などを備える	敷地506坪6合 ³⁶ 、建物については図面添付。平屋造りで、保育室、遊戯室、保姆室などあり。
保育室	幼児4人につき1坪以上	図面には保育室2、保育分室1あり
遊園	幼児1人につき1坪以上	図面には南側に庭園あり
必要備品	恩物、絵画、遊戯道具、楽器、黒板、机、腰掛、時計、寒暖計、暖房器具	記述なし

(3) 京北幼稚園開設

井上圓了は、1905年（明治38）年5月3日に開設式を行い、京北幼稚園を開設し園長となった。写真1が、開設当時の写真である。京北幼稚園ができた1905（明治38）年の日本の幼稚園数は、表4にあるように313園であり就園率1.2%である。日本の中で、幼稚園の数が少ない時代に、早くも、京北幼稚園が設立されたことがわかる。

井上は、1905年（明治38年）5月から1907年（明治40）年3月まで園長の職に就いていた。

表4 1905年と2016年の日本の幼稚園数・在園児数³⁷

年号	日本の人口	幼稚園数	在籍園児数	5歳児園児数	幼稚園の就園率
1905年	46,620,000人	313園	28,676人		1.2%
2016年	126,940,000人	11,138園	1,328,791人	491,216人	48.8%

写真1は、京北幼稚園が設立された頃の写真である。現在のところ、当時の写真は、この1枚のみしか見つかっていない。一番右の男性が、井上圓了である。1905年（明治38年）の写真であると考ええる。1906年（明治39）年1月には、井上圓了は、病気のため、教育の職を退いている。そのため、1905年（明治38）年5月～1906年（明治39）年1月の間に撮影されたと考えられる。

背後の日章旗と旭日旗は、明治期時代中頃には、お祝いの日に共に掲げられたものである。写真1の日は、幼稚園設立のお祝いの日の記念写真と考えるのが自然であろう。

京北幼稚園の設立については、フレーベル会⁴⁰の機関紙『婦人と子ども』⁴¹には、資料1のような記事が載っており、井上圓了の幼稚園設立に関心の高いことがわかる。

1918年（大正7）年1月22日の遺言状⁴²には、「葬式ハ東洋大学カ又ハ京北幼稚園ヲ借りテ執行スベシ」とあり、京北幼稚園を大切に思っていたと考えられる

(4) 保姆について

幼稚園の教員は、1947年（昭和22年）の教育基本法で幼稚園が学校教育体系の一環に位置づけられて、教諭、助教諭の名称になるまで保姆と呼ばれていた。

▼ 明治38年創立の頃、円了と園児たち



写真1 1905年（明治38年）創立の頃の京北幼稚園³⁸

京北幼稚園
文學博士井上圓了氏は、日露戦役紀念事業として、
今回、小石川區富士前町に、幼稚園を設立し、去
る五月三日開園式を舉行したり。地所は廣濶なる
高臺にして園舎も清潔完美なりとのこと。主任保
姆としては本會々員、林富美子之に當り、同じく
會員富高たま子之に副として日々熱心に從事せら
れ居るといふ。博士の如き知名の教育家が、今
日、幼稚園問題に着手するに至りたるは、まこと
に斯道の爲に喜ぶべきことにして、吾等は、この
幼稚園の未長く健全の發達をせられんことを望む
ものなり。尙、機を得て參觀し詳細を報ずること
あるべし。

資料1 京北幼稚園の開園『婦人と子ども』³⁹1905年6月

資料1から、京北幼稚園にはフレーベル会の会員である2名の保姆が就任していることがわかる。

主任保姆 林富美子（はやしふみこ）

副 富高たま子

の2名であり、写真1の後列の白い着物の女性と思われる。黒い着物の女性は、不明である。

林富美子については、『婦人と子ども』1901年1号⁴³の「名簿」に「フレーベル會幹事 女子高等師

範学校 林 ふみ」の記述があり、同一人物である可能性がある。お茶の水女子大学幼稚園 (2016)⁴⁴「お茶の水女子大学附属幼稚園創立140周年記念誌」には、1899年 (明治32) 年頃の職員写真に「林ふみ」の名前がある。この職員写真の「林ふみ」と写真1の「林富美子」と思われる人物を比較してみ、同一人物であるかどうかは判定できなかった。しかし、もし同一人物であれば、女子高等師範学校附属幼稚園の保姆をした後に、京北幼稚園の保姆になったことになる。

富高たま子については、「会報 入会」『婦人と子ども』1902年6号に「東京市本郷区駒込富士前町51 京北幼稚園 富高 たま」の記述があり、京北幼稚園の保姆となったと同時に、フレイベル会に入会したことがわかる。

これらのことから、2名の保姆は女子高等師範学校の幼稚園教育の方法を学んだ者であると言える。

専門教育を受けた保姆が少ない時代に、京北幼稚園は高度な知識を持った得難い人材を得ている。『私立京北幼稚園設立認可願書』には「金七百八十円 保姆及助手月給1ヶ年分 但一名二付月給平均十三円ノ予定」とあり、当時の小学校教師の初任給10~13円とほぼ同額に設定してある。

(5) 日本初のエプロン着用の可能性

一般に、日本の幼稚園でエプロンを着用するようになったのは大正時代と言われているが、京北幼稚園では、明治38年に既にエプロンを着用している。エプロンは全員がしているわけではなく、41人中少なくとも7人の子どもがエプロンを付けていることがと見て取れる。そのうち6名は男子のようである。

牛嶋愛 (2011)⁴⁵によれば、幼稚園でエプロンをしている子どもの写真を調べたところ、得られた中で一番古いものが写真1の1905年 (明治38) 年頃の京北幼稚園の子どものエプロン着用の写真であった。女子師範学校附属幼稚園の子どもたちは、1877年 (明治9) 年頃には洋服が目立つが、この時点では、エプロンを着用している者はいない。牛嶋愛 (2011)⁴⁶は、東京女子高等師範学校附属幼稚園に関しては、1916年 (大正5) 年のエプロン着用の写真が見つかった中では一番古いと述べている。

河岡潮風 (1909年)⁴⁷によれば、東京女子高等師範学校の幼稚園を見学した際のコメントとして、「男の子はたいてい洋服で、女の子は和服で胸から大きな前垂 (エプロン)」をかけている。保育料は1圓50銭で少々高い」とある。このことから、東京女子高等師範学校附属幼稚園では、1909年 (明治42) 年にはエプロンを着用していたことがわかる。

写真に関しては、日本中どここの幼稚園に関しても、関東大震災や第二次世界大戦等で失ってしまったことが考えられる。しかしながら、現在得られている資料の範囲では、幼稚園における日本初のエプロン着用の可能性がある。

第3節 園舎

京北幼稚園の園舎は、『私立京北幼稚園設立認可願書』に添付された図面である資料2、資料3によると、敷地は約1672㎡の平屋であり、遊戯室1、保育室2、保育分室1、保姆室応接所、付添人控席、便所が備わった建物である。

朝、夕に子どもが全員集まる保育が一般的な時代であったので、そのための遊戯室があるのだと考

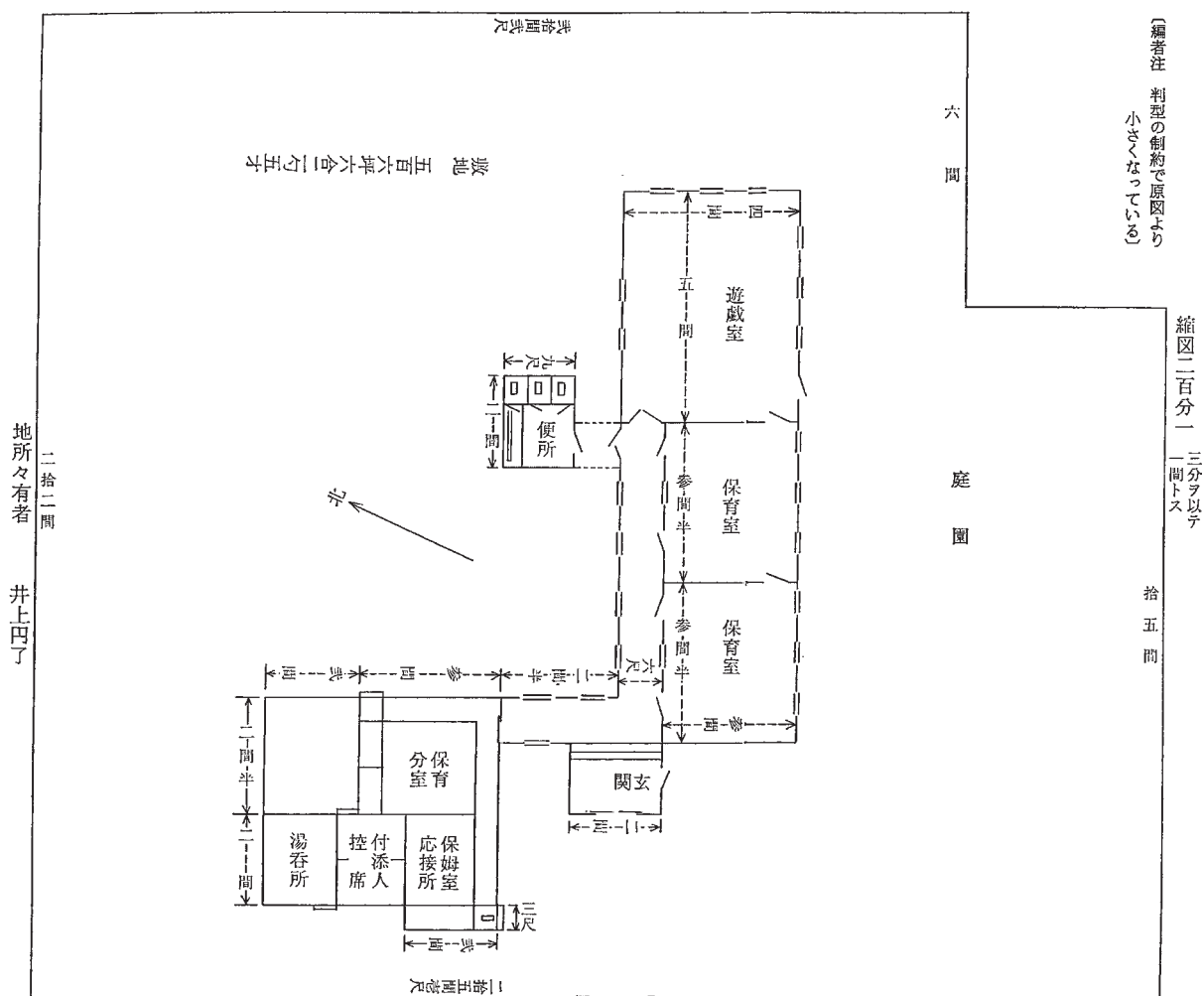
える。

保育室は、南側の庭園に向けて窓は多く、光は取り込めたのではないだろうか。保育室から庭園へのドアはないが、遊戯室からは庭園に出ることができたとみられる。

保育分室がどのような目的で使用されたかは不明であるが、『私立京北幼稚園設立認可願書』に3クラスを想定していたことから、1つの教室としての使用も考えられる。また、写真1の子ども41人が在籍者のすべてであるとする、2つの保育室を使い、保育分室は別の保育の用途に用いたとも考えられる。この点についての資料はない。



資料2 京北幼稚園の図面⁴⁸



資料3 京北幼稚園の見取り図⁴⁹

第4節 保育内容

1905年(明治38年)2月に東京府提出した、『私立京北幼稚園設立認可願書』⁵⁰にある「保育課程表」を表5に示す。遊戯・唱歌・談話・手技を課目としていた。フレーベルの恩物を保育教材として使用していたことが分かる。

資料3の京北幼稚園の見取り図から、朝、夕に子どもたちが全員集合し、当時の保育の特色であった会衆が行われていたと推測する。

東京都公文書館(1966年)⁵¹には、「京北幼稚園は仏教系のものであった」という記述があるが、京北幼稚園が特に仏教の教育を行っていたという資料は得ていない。菊地章太(2013)⁵²は、井上圓了の仏教への強い思いを持っていたことを記している。

井上圓了が寺院を使つての幼稚園構想⁵³を持っていたことから、黎明期の京北幼稚園で仏教関係の保育内容があったかどうかは資料がないので不明である。また、2016年現在の京北幼稚園は仏教系の保育・教育は行っていない。

表5 京北幼稚園の保育内容 保育課程表

合計	手技	談話	唱歌	遊戯	課目	保育課程表
四種	練習セシム	恩物ヲ用ヒテ手及眼ヲ	寓言、通常、天然、人工	簡易ナル歌曲	隨意遊戯、共同遊戯	種 類
五十六回	十六	十二	十二	十六 三十分間	一日回数	週
二十八時間	八	六	六	八	一週時数	

第3章 結論

(1) 井上圓了は、幼児教育においても、『教育勅語』を念頭においた徳育教育が重要であると考えていた。そして、徳育教育は中学以上の教育の中で教えるよりも、幼児期に教えたほうが身につくと考えていた。

(2) 京北幼稚園を、「日本主義の幼稚園」にしようとしていた。1905年当時、模範となっていた女子高等師範学校附属幼稚園はアメリカ的だと考えたからである。しかし、日本では幼稚園自体が1877（明治9）年に初めて設立された状況で、京北幼稚園設立の1905年（明治38）年の頃の日本各地の幼稚園では、女子高等師範学校附属幼稚園を模範として保育を行うことが精一杯であったと考える。それ故、井上圓了の理想とする「日本主義の幼稚園」を黎明期の京北幼稚園で実現することは難しかったのではないだろうか。

京北幼稚園の開園時の保姆2名は、女子高等師範学校の影響下にあるフレーベル会に所属していた。主任保姆の林富美子は女子高等師範学校の関係者と推測でき、保姆2名は、女子高等師範学校附属幼稚園の保育を良く知っている人物であった。1877（明治9）年頃の幼稚園教育としては、京北幼稚園は、高いレベルの幼児教育を実施していた。

(3) 下流社会の子どものために、寺社を活用した幼稚園の普及を目指すべきであるとの考えを持っていた。これは、海外視察の際に、キリスト教の教会が各地にあり徳育教育に役立っていることを見聞したことが影響している。幼稚園が上流社会の子どもが対象になっていた時代に、貧富の差なく子どもを大切にしようという独創的な考えを持っていた。

まだ見るできていない資料があり、大変気になっている。今回、知ることができた井上圓了の幼児教育理念や黎明期の京北幼稚園のようすに加え、今後は、更に多くの資料に当たることにより、より正確な「井上圓了の幼児教育理念と黎明期の京北幼稚園」を示すことができるようにしたい。そして、東洋大学の教育において、学祖による明治期の幼児教育の斬新な考え方を学生に伝えたい。

注

- ¹ 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社1979年 pp820-821
- ² 三浦節夫「井上円了に関する研究史」『国際哲学研究』1号pp95-99 東洋大学2012年
- ³ 三浦節夫『井上円了の教育理念 歴史はそのつど現在が作る』東洋大学 1987年第1版、2014年改訂第17版
- ⁴ 竹村牧男『井上円了の教育理念』東洋大学井上円了記念学術センター 2011年
- ⁵ 東洋大学ホームページを資料として作成した。
<http://www.toyo.ac.jp/site/founder/founder10.html> 2016年10月1日アクセス
- ⁶ 井上圓了「幼稚園論」『天則』第四編第十号pp5-7 哲学書院1892年（明治25年）4月7日
- ⁷ 井上圓了「宗教家をして宜く慈善事業を起さしむへし」『日本人』第51号pp315-316 政教社1890年（明治23年）7月18日
- ⁸ 井上圓了「娼婦論者に告ぐ」『日本人』第45号 pp60-63政教社1890年（明治23年）4月3日
- ⁹ 井上圓了『西航日録』鶏声堂 1904（明治37）年1月18日
- ¹⁰ 井上圓了「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園の事に及ぶ」『日本之小学教師』7巻第77号1905（明治38）年5月15日pp4-7

- ¹¹ 井上圓了「哲学館開設の旨趣1887（明治20）年6月」『教学論集45』1887（明治20）年9月5日p.32にある。東洋大学『東洋大学創立100周年記念出版 井上圓了選集』第25巻 2004年 pp750-751に拠った。
- ¹² 井上圓了「修身教育普及の一策」『修身教會雜誌』第17号1905（明治38）年5月11日 pp77-79
- ¹³ 東洋大学創立百年史編纂委員会『東洋大学百年史 資料編1・下』1988年 p.996
- ¹⁴ 週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和（朝日文庫）』朝日新聞社1988年、週刊朝日編『戦後値段史年表（朝日文庫）』朝日新聞社1995年
- ¹⁵ 井上圓了「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園のことに及ぶ」『日本之小學教師』1905（明治38）年5月15日 pp4-7
- ¹⁶ 井上圓了「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園の事に及ぶ」『日本之小学教師』7巻第77号1905（明治38）年5月15日 pp4-7
- ¹⁷ 井上圓了「修身教育普及の一策」『修身教會雜誌』第17号1905（明治38）年5月11日 pp77-79
- ¹⁸ 著者名なし「井上博士の幼稚園談」『婦人と子ども』フレーベル会 1905年6月 pp54-60
- ¹⁹ 加賀国、越中国、能登国
- ²⁰ 井上圓了「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園の事に及ぶ」『日本之小学教師』7巻第77号1905（明治38）年5月15日 pp4-7
- ²¹ 井上圓了「修身教育普及の一策」『修身教會雜誌』第17号1905（明治38）年5月11日 pp77-79
- ²² 著者名なし「井上博士の幼稚園談」『婦人と子ども』フレーベル会 1905年6月 pp54-60
- ²³ 菊地章太『妖怪学の祖 井上圓了』角川学芸出版 2013年 pp52
- ²⁴ 三浦節夫「井上円了とその家族：生家の慈光寺と栄光寺を含めて」『井上円了センター年報』2006年9月20日 pp113-140
- ²⁵ 池田英俊「井上圓了の近代仏教論と慈善」『印度學佛教學研究第四十九巻第二号』2001 pp518-525
- ²⁶ 湯本武比古「嗚呼井上名誉校長」『故井上圓了先生』京北中学校校友会・京北実業学校同窓会 1919年 pp1-3
- ²⁷ 園名は東京女子師範学校、東京師範学校附属幼稚園、女子高等師範学校附属幼稚園、東京女子高等師範学校附属幼稚園と名称が変化し、その後も名称が変化し2016年現在は国立大学法人お茶の水女子大学附属幼稚園となっている。表2参照
- ²⁸ 文部省「学制百年史」株式会社 株式会社帝国地方行政学会1981 pp198-199
- ²⁹ 『東洋哲学』第12輯第3号東洋哲学発行所1902（明治35）年3月5日にある。東洋大学創立百年史編纂委員会『東洋大学百年史 資料編1・上』1988年7月20日 pp.113に拠った。
- ³⁰ 井上圓了述、秋山悟庵編『圓了講話集 全』鴻明社 1904年 p.338-340
- ³¹ 中川理吉『学祖 井上圓了先生略伝・語録』京北学園1947年 p.39
- ³² 文部省『学制百年史』株式会社帝国地方行政学会 1981年 p.338
- ³³ 文部省「学制百年史」株式会社帝国地方行政学会1981 p.338
- ³⁴ 東洋大学創立百年史編纂委員会『東洋大学百年史 資料編1下』東洋大学 1988年 pp994-999に収められている。
- ³⁵ 文部省「学制百年史」株式会社帝国地方行政学会1981 pp339-341
- ³⁶ 約1672m²
- ³⁷ 1905年の人口は、内閣統計局『日本帝国人口静態統計』1905年による。幼稚園のデータは、文部省『幼稚園教育百年史』1979年による。2016年の人口は、総務省統計局2016年10月20発表の2016年5月1日の確定値である。幼稚園のデータは、文部科学省2016年8月4日発表の「平成28年度学校基本調査（速報値）2016年5月1日」による。保育所や幼保連携型認定こども園については、含まれていない。
- ³⁸ 京北学園九十年史編纂委員会「京北学園九十年史」1988巻頭
- ³⁹ 執筆者名なし「京北幼稚園」『婦人と子ども』フレーベル会1905年6月 第5巻第6号p.61
- ⁴⁰ お茶の水女子大学附属幼稚園『お茶の水女子大学附属幼稚園創立140周年記念誌』2016年p.25によれば、中

村五六の『保姆会』と多田房之輔の『東京市保育法研究会』が合流し、『フレーベル会』が発足した。機関紙は『婦人と子ども』であった。

- ⁴¹ フレーベル会『婦人と子ども』1905年6月 第5巻第6号p.61
- ⁴² 井上圓了『遺言状』コピー 1918年（大正7）年1月22日 長岡市立図書館蔵
- ⁴³ フレーベル会『婦人と子ども』1901年1月 第1巻第1号 巻末
- ⁴⁴ お茶の水女子大学幼稚園『お茶の水女子大学附属幼稚園創立140周年記念誌』2016年 p.25
- ⁴⁵ 牛嶋愛「幼稚園におけるエプロンの歴史」『平成26年度東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科子ども支援学専攻卒業論文』2011年 p.4
- ⁴⁶ 同上 p.10
- ⁴⁷ 河岡潮風「東京女子高等師範学校」『東都游学学校評判記』博文館（1909年3月） p.275
- ⁴⁸ 東洋大学創立百年史編纂委員会『東洋大学百年史 資料編1下』東洋大学 1988年 pp998-999 図面には、「『明治38年文書類纂 学事』東京都公文書館所蔵」とある。
- ⁴⁹ 前同書pp996-999
- ⁵⁰ 前同書pp995-996
- ⁵¹ 東京都公文書館『都史紀要14 東京の幼稚園』東京都情報連絡室都政情報センター管理室1966年 p.172
- ⁵² 菊地章太『妖怪学の祖 井上圓了』角川学芸出版 2013年 pp23-28
- ⁵³ 井上圓了「修身教育普及の一策」『修身教會雑誌』第17号1905（明治38）年5月11日 pp77-79

引用文献・参考文献一覧

雑誌

- 1 三浦節夫『井上円了－日本近代の先駆者の生涯と思想－』株式会社教育評論社 2016年
- 2 角藤智津子「幼稚園の祖フレーベルの歌《Das Taubenhaus》から日本の子どもの歌《家鳩》への変化」『全国大学音楽教育学会紀要』2015年 pp1-10
- 3 三浦節「井上円了に関する研究史」『国際哲学研究』1号 東洋大学 2012年 pp95-99
- 4 池田英「井上圓了の近代仏教論と慈善」『印度學佛教學研究』第49巻第2号 日本印度学仏教学会 2010年 pp518-525
- 5 三浦節「井上円了とその家族：生家の慈光寺と栄光寺を含めて」『井上円了センター年報』2006年9月20日 pp113-140
- 6 湯本武比古「嗚呼井上名誉校長」『故井上圓了先生』京北中学校校友会・京北実業学校同窓会 1919年 pp1-3
- 7 著者名なし「井上博士の幼稚園談」『婦人と子ども』第5巻第6号 フレーベル会 1905（明治38）年6月 pp53-60
- 8 井上圓了「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園の事に及ぶ」『日本之小学教師 第7巻第77号』国民教育社 1905年（明治38）年5月15日 pp4-7
- 9 井上圓了「修身教育普及の一策」『修身教會雑誌』第17号 修身教會雑誌発行所 1905年（明治38）年5月11日 pp77-79
- 10 著者名なし『婦人と子ども』第1巻第1号 フレーベル会 1901年1月 巻末
- 11 井上圓了「幼稚園論」『天則第四編第十号』哲学書院 1892年（明治25）年4月14日 pp5-7
- 12 井上圓了『日本人』第45号 政教社 1890（明治23）年4月3日 pp6-63
- 13 井上圓了『日本人』第51号 政教社 1890（明治23）年7月18日 pp315-316

著書

- 1 お茶の水女子大学附属幼稚園『お茶の水女子大学附属幼稚園創立140周年記念誌』2016年
- 2 三浦節夫『井上円了－日本近代の先駆者の生涯と思想－』株式会社教育評論社 2016年
- 3 三浦節夫『新潟県人物小伝 井上円了』新潟日報事業社 2014年
- 4 菊地章太『妖怪学の祖 井上円了』角川学芸出版 2013年
- 5 東洋大学井上圓了記念学術センター『井上圓了選集 全25巻』東洋大学 2004年
- 6 竹村牧男『井上円了の教育理念』東洋大学井上円了記念学術センター 2011年
- 7 東洋大学創立百年史編纂委員会『東洋大学百年史 通史編2』東洋大学 1993年
- 8 京北学園九十年史編纂委員会『京北学園九十年史』京北学園 1988年
- 9 東洋大学創立百年史編纂委員会『東洋大学百年史 資料編1下』東洋大学 1988年
- 10 東洋大学井上圓了記念学術センター編集『井上圓了の教育理念 歴史はそのつど現在が作る』東洋大学 1987年 第1版、2014年改訂第17版
- 11 お茶の水女子大学百年史刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』お茶の水女子大学 1984年
- 12 文部省『学制百年史』株式会社帝国地方行政学会 1981年
- 13 大阪市立愛珠幼稚園 大阪市立愛珠幼稚園『愛珠幼稚園百年史』1980年
- 14 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりの国株式会社 1979年
- 15 京北学園八十年史編集委員会『京北学園八十年史』京北学園 1978年
- 16 東京都公文書館『都史紀要14 東京の幼稚園』東京都情報連絡室都政情報センター管理室1966年
- 17 中川理吉『学祖 井上圓了先生略伝・語録』京北学園1947年
- 18 東洋大学『東洋大学創立五十年史』東洋大学 1936年
- 19 内閣統計局『日本帝国人口静態統計』1905（明治38）年
- 20 井上圓了『西航日録』鶏声堂 1904年（明治37）年1月18日
- 21 井上圓了述 秋山悟庵編『圓了講話集 全』鴻明社 1904年 p.338-340
- 22 東洋哲学発行所『東洋哲学』第12輯第3号 東洋哲学発行所 1902（明治35）年3月5日

その他

- 1 総務省統計局 2016年10月20発表の2016年5月1日の人口確定値
- 2 文部科学省 平成28年度学校基本調査（速報値）2016年5月1日
- 3 牛嶋愛「幼稚園におけるエプロンの歴史」『平成26年度東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科子ども支援学専攻卒業論文』2011年
- 4 井上圓了『遺言状』コピー 1918年（大正7）年1月22日 長岡市立図書館蔵
- 5 河岡潮風「東京女子高等師範学校」『東都游学学校評判記 博文館 1909（明治42）年3月 pp263-289

Inoue Enryou's early childhood educational philosophy and the dawn of Keihoku Kindergarten

KAKUTO Chizuko, TAKAHASHI Naomi

[1] Enryou Inoue insisted that a moral education which was based on Kyouiku-chokugo could be a significant factor in early childhood education, and he believed that providing moral education to childhood would be more efficient than it starting with teenagers.

[2] In 1905, it was planned that Keihoku Kindergarten would be a model as a Japanese national kindergarten, because it was thought that a model of a kindergarten which was attached to a girls' higher normal school seemed to be very American. Yet, it could be difficult to launch it, because under the circumstances of the first kindergarten being established in Japan in 1877, almost all kindergartens in Japan were fully occupied on upbringing which was based on the school's doctrine of that age. That is why establishing the Japanese national kindergarten which was idealized by Enryou Inoue was impossible to realize at Keihoku Kindergarten in that era.

When Keihoku Kindergarten was launched as a business, two kindergarten teachers were working there. Both teachers belonged to a Froebel club which was under the influence of the girls' higher normal school. It can be presumed that the chief teacher Tomiko Hayashi was a participant in the girls' higher normal school, and these two teachers were familiar with that school's attached kindergarten's upbringing system and education, thus, around 1905, Keihoku Kindergarten could enable pupils to provide a high level of early childhood education, compared with other kindergartens.

[3] Inoue had an opinion which was that to help poor children, temples should be effectively used and generalized as kindergartens. This idea was thought up when he did overseas inspection; he experienced that countries were dotted with a lot of churches here and there, and these were good for providing a moral education. Even though kindergartens were only aimed for educating wealthy children in this era, he tried to educate not only wealthy children but also poor children.